

文化財ウォーキングマップ

(佐久市 岩村田 コース)



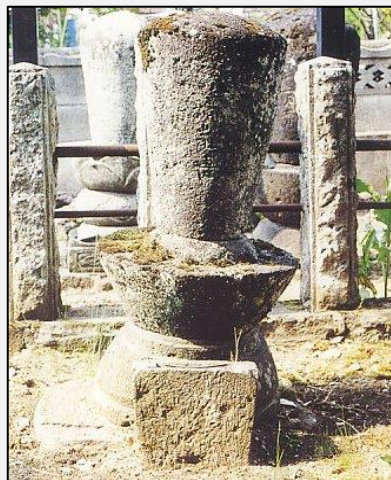
①北高禪師墓碑（県史跡）

北高禪師は出羽国(山形県)の人で、北畠顕家の後裔といわれる。12歳で父を失い、僧となり、諱(死後にいう生前の実名)を全祝、後に北高と号した。

武田信玄は佐久郡の攻略を完了した永禄年中、兵火で荒廃した龍雲寺の再興をはかり、北高禪師を請じて中興開山とした。信玄は禪師に帰依すること篤く、元亀3年(1572)龍雲寺を信濃国曹洞宗僧録に任じ、同年甲州・信州・上州3か国の僧を集めて千人江湖会を行わせ、信濃国領内曹洞宗会下(修行僧)のために法度を定めた。

勝頼もまた北高禪師の徳を慕い、信濃国曹洞宗僧録に任じ、天正2年(1574)祖父信虎の葬礼に請じて導師とし、龍雲寺の再興には小県郡番匠の軍役を免じて造営に当たらせた。

このように禪師は、武田親子の篤い信望をあつめて龍雲寺を再興し規式を定め、曹洞宗の興隆をはかった高僧で、天正14年(1586)12月、80歳の高齢で寂した。碑は無縫塔(六角または八角の台座の上に塔身が卵形をなした石塔)で、平面円形の基礎・蓮座・塔身の三部からなり、基礎は反花を省略、蓮座にも請花がない。塔身は頭部がわずかに突出し、頂部と身部の接点の肩が角張り、下に至るに従い細まり、正面下部に北高の二字が陰刻してある。



③鼻顔稲荷神社

今から約400年前の永禄年間(1558年～1569年)に、京都の伏見稲荷からの御分霊を祀ったと伝えられており、日本五大稲荷のひとつに数えられる。鳥居をくぐり参道を進んだ御姿殿には、巻物を啜えた子持の稲荷狐が鎮座して参拝客を出迎える。湯川の断崖に朱塗りの柱で支えられた空中楼閣の社殿は、京都の清水寺と同じ懸崖造りであり、薄暗い崖の中に組み込められた本殿、旧本殿が、厳かで神秘的な雰囲気醸し出している。

祭神は宇迦之御魂命(うかのみたまのみこと)で、天下泰平、五穀豊穰、家内安全、商売繁盛、交通安全、進学成就の守護神として信仰を集め、毎年2月11日の「初午祭」には、参道で新しいだるまを買い求める参詣者や、縁起物売る露店でにぎわいを見せる。



②王城のケヤキ（県天然記念物）

中世の佐久郡東部に威勢を張った大井氏宗家の居城跡(県史跡)にあり、この地域の最古木で王城のシンボルとして尊重されている。

樹下には氏神・道祖神・石尊山・不動尊・金比羅の諸神が祭られ、周辺一帯は王城公園として市民に親しまれ、信仰の対象地ともなっており、年神のおしめ・燈明などもあがっている。

植物分類上は、ニレ科ケヤキ属に属するケヤキである。

樹齢は未詳であるが、目通り周9.15m、樹高26m、枝張り南北31m、東西31mである。



④岩村田ヒカリゴケ産地

(国天然記念物)

ここに自生するヒカリゴケは、明治43年(1910)、旧制野沢中学校(現野沢北高等学校)の生徒によって発見され、博物学教師の小山海太郎氏が東京帝国大学(現東京大学)の三好博士に鑑定を依頼し、日本にもヒカリゴケがあることがはじめて同定されたものである。

ヒカリゴケは分類上隠花植物—蘚苔亜門—蘚苔類に属し、ヒカリゴケ科ヒカリゴケ属ヒカリゴケは1科1属1種の蘚類である。洞穴の中など光線の少ない、湿気が多い所に育つ黄緑色の光を放つ植物で、茎葉は単一で羽状に見え、よく成長したもので5~7mm、雌雄異株で雌株の上部に円笠形の子のうをつける。その中の胞子が地面に落ちて糸状態をつくるが、この糸状態を顕微鏡で見ると、だるま型のガラス状細胞が1列につながり、細胞内に入った光が細胞の底で反射されて葉緑体を照らし美しい黄金色の光を放つ。自生地の洞穴は洪積層・湯川層の角礫凝灰砂岩の層間を侵食した洞穴で、入口の間口2m、奥行7m、高さ1.5m、面積40m²である。

